【書　評】

# 山崎延吉著
# 『農村自治の研究』

東京・農山漁村文化協会，1977 年（初出 明治 41 年）

柴　田　　有

「都会は花なり，農村は根なり。」これは明治生まれの農政家山崎延吉が『農村自治の研究』という著作に残した言葉です。都会と農村は互いに異質な生活を送っている，にもかかわらず一体を成すべきもの，そして釣り合っていなければならないものだ，という両者の関係を教えているのでしょう。味わいがあって飽きない文章だと思います。それにどこかしら哲学的な含蓄を感じさせる言葉です。

山崎延吉という人物のプロフィールを紹介しておきましょう。延吉（のぶよし）はしばしば自署に号を付して,「我農生　山崎延吉」と称したそうです。「我農生」とは何でしょうか。三様の意味があるのだと言います。我は農に生まれ，我は農に生き，我は農を生かすということなのです。この人は三拍子が好みであったらしく，三つ組の名文句が他にも出てきます。それはともかく,「我農生」には延吉の心意気がよく表れています。農村に身を置いて，農民の側から発言するというスタンスは生涯一貫していました。これと比較すると，流行の地産地消はやや地消の面に偏ってはいないでしょうか。こうすれば集客力が伸びるとかいった，アイディアやノウハウの類が勝ち過ぎている気がします。現場で働く農民の姿，農村の生活と調和した地産地消でなければならないと思います。

延吉の活動で最も顕著なものを挙げるとすれば，それは「興村行脚（こうそんあんぎゃ）」であると言えます。興村行脚とは全国を巡って，各地農村の村おこしを呼びかけた講演旅行のことです。彼の講演の意図は，農村の自力更生の道を訴えることにあったようです。当時の社会状況の中で自信喪失になりがちだった農村を激励し，もう一度自力で立ち上がらせること，そこに焦点が定まっていたのです。彼の話はどの村でも人気が高く，講演会にはいつも満員の聴衆が集まって来ました。興村行脚の旅は日夜を問わず続きます。明治 41 年から昭和 9 年に至る 30 年間に，6,165 回の講演を行っています。飛行機の便はなく，今日ほど鉄道も発達しておらず，ましてや IT 技術など考えもつかぬ時代のことです。まさに体を張って農村を巡り続けたと言えるでしょう。この驚くべき数字の内訳は図を見ていただきたいと思います。

延吉の講演は分りやすい言葉でなされました。各地の篤農家を名指しで称揚し，返す刀で中央農政の農業オンチをからかうような面も見られます。ですからそれだけでも農民聴衆の拍手喝采を浴びたに違いありません。しかしもう一面では農村の実情を知り尽くした指導者として，農業の意義，農法，農家の経営，農村生活と組織など多岐にわたって優れた発言を吐いています。先見性に富んだ方針を示し，具体的な方策を助言することが講演の中心的な内容でした。『農村自治の研究』という代表著作には，こうした講演内容と講演の口調が多かれ少なかれ反映しています。

出版の年号を見ていただければわかるように，『農村自治の研究』という著作は日露戦争の直後に執筆されたものです。日露戦争と言えば歴史の教科書などで，日本の勝利に終わった輝かしい事

「興村行脚」全国講演回数表

（明治 41 年～昭和 9 年までの 30 年間）

山崎延吉全集第 6 巻（目次裏）より

件と受け取られています。それはそうかもしれませんが，日本国内に残った戦争の傷跡は想像以上に大きかったようです。戦争によって巨大な利益を得た人々と，戦争が終わっても相変わらず苦しい生活を強いられる大衆との間に格差が生じたのです。農村の窮乏は続きます。それはやがて国家に対する民衆の不信感となって現れて来ます。こうした風潮のなかで政府と官僚は打開の策を講じなければならなかったのです。そのひとつが明治末期に若手官僚たちの企画した，「町村是（ちょうそんぜ）」調査・作製運動という国家的なプロジェクトです。農村をこのまま放置していたのでは社会の新たな活力は出てこない，むしろ官僚主導型の科学的対策によって日本の農村を復興させるべきだという判断から出た運動です。熱意ある新進官僚たちは社会学的な統計調査の手法によって，全国各地の隅々まで農村の実情を把握しようとしました。その結果にもとづいて地方改良の政策を立案しようというわけです。それと並行して明治政府は，国家神道体系の樹立という課題とも取り組んでいきました。

町村是運動は当時の世論を巻き込んで全国的流行になっていきます。農村はその勢いに押されて協力を余儀なくされ，上意下達を受け入れるしかありませんでした。しかしそうした世相のなかで，例外的に批判の声を挙げた人たちがいます。その一人は民俗学者柳田國男です。彼は『時代ト農政』という著作のなかで官僚主導型の農村対策に批判

を加えています。監督庁が予め準備した様式を差し出して，空欄に記入させるような調査では，農村の実態は把握できないというのがその趣旨です。農業者が実地に抱いている疑問を自分たちの間で相談し，そこから提出してきた意見でなければ本当の事は分らない，ということです。もう一人柳田と独立に，当時の情勢に対抗しようとしたのが山崎延吉という人です。国家が農村を指導する動きに対して，農村は自治自立を目指すべきだと主張したのです。それが『農村自治の研究』という書名が意味するところなのです。けれどもそれは農村の独立運動をそそのかすようなものではありません。

初めに述べたように，都会と農村は一体を成すべきなのです。根と花のように一体を成し，共存共栄すべきだという考えです。根が勝手に独立したのでは，美しい花は咲かない。延吉はそのことをこう語っています――「今それ健全なる都会を得んには，必ず健全なる農村を得ねばならぬ，げに農村は都会なる花に対しては，その根に相当するのである。」（50 頁）野に咲く花を見れば，そこに花もあれば，葉も茎も根もあります。そして一本の草花が生きているということも，われわれは知っています。しかし花は花だけでは生きていないし，根も根だけでは生きていません。全体の一部として生きているのです。とすると，一本の草花にも或る全体性が具わっているのです。

「都会と農村」またはそれに類した題の著書・論文は，明治時代からずっと書き継がれており，現代に至るまでその跡を辿ることができます。またこの他にも，表題には出ていないが実質的に「都会と農村」という主題で書かれた著作が相当数あります。ですからそれを追って行けば，都会と農村の思想史が書けることになります。ここでは筆者の関心に照らして，代表的な著作を 4 点挙げておきましょう―――，

山崎延吉『農村自治の研究』，明治 41 年（1908 年）
柳田國男『都市と農村』，昭和 4 年（1929 年）
守田志郎『むらの生活誌』，昭和 50 年（1975 年）
宇沢弘文『社会的共通資本』，平成 12 年（2000 年）

当然のことながら，哲学著作と呼べるものはこの中に一冊もありません。しかしここには面白い事情があります。よく読んでみると分かりますが，著者達は，いつの間にか哲学的な問題に取り組んでいるのです。つまりこの著者たちは意図せざる哲学者だということが出来るのです。そこがとても魅力的です。では，どこが哲学的なのでしょうか。延吉の「釣り合い」を例にして考えてみます。釣り合いが哲学的なテーマであることを，多分，延吉自身は意識していなかったと思います。しかし釣り合いこそがカンジンカナメだということを彼は力説します。都会と農村の釣り合い，地主と小作人の釣り合いなどを論じて，この言葉を切り札のように使っているのです。

「釣り合い」という言葉の意味に，あらかじめ一言触れておきましょう。現代人は釣り合いという語をあまり用いなくなっているように見受けます。むしろバランス，調和，均衡，似合いなどの言い方を多く使うのではないでしょうか。これらの用語は同義語あるいは類語として扱うことができます。これらの語群の特徴は，何と何の調和と言うように，二者の調和，二者の釣り合いを言い表すところに認められます。今このことを前提にしてみると，さらにこういうことも視野に入ってきます。釣り合いの状態にある二者それぞれについて，何が見て取れるのか。今度はそこに注目してみるのです。二者はそれぞれ適度・適量であることによって，すなわち過度・過重にならないことによって，調和をもたらしているのだと言えないでしょうか。服装の調和を考えてみれば，それはすぐにわかります。ジーンズとＴシャツとの調和と言えば，ピンとくる人も多いでしょう。このようにして釣り合いの概念には，適度，限度，程ほど，中庸などの内容が含まれていることに気づきます。

都会と農村の釣り合い，それがどういうことなのかを少し考察してみました。『農村自治の研究』という著作の課題はまさにそこにあったわけです。しかしながらここにはひとつの問題が伏在します。それは何か。延吉は二者の釣り合いをとるためにどうすればよいのか，具体的方策や提案をほとん

ど語っていないのです。どうすれば都会と農村の釣り合いが回復するのかという点に，直接には触れていないのです。この本を手に取った読者はそこで意外な印象を受けることでしょう。そこに書いてあるのは，ほとんど農村に関することばかりです。だから失望を感じる人もあるに違いありません。問題点を挙げて次に解決策を述べるといった思考法に慣れている我々は，直ちに事態の打開策を読み出そうとするのです。しかし延吉はあえてその種のことを口にしなかったのではないか。そう考えられるのです。私の理解では，延吉はこの点で注意深い思想家であったと見られます。

都会と農村の釣り合いをあれほど力説する人が，釣り合いを生むための直接的方策となると，ほとんど何も語らない。この態度をどう理解すればよいのでしょうか。それを考えるためには，「釣り合い」についてもう少し検討してみる必要があります。それはこういうことなのです。都会と農村の釣り合い，花と根の釣り合い，色調と柄の釣り合いなどと言う時，その釣り合いはどういう種類の知識か。理論知なのか経験知なのか。それを問うてみるとどういうことになるのでしょうか。

様々な例を思考実験してみて，今，異質なもの相互の釣り合いは経験知だとしてみましょう。するとその場合，こういうことになるでしょう。すなわち，釣り合いが成立する条件は理論的に導くことが出来ない，と。ただ，釣り合いがとれた時に，経験によってそれと知るだけなのです。一組の男女が似合いの夫婦となるかどうかは，所定の条件を整え，所定の手続きを経れば，理論的に必ずそうなるとは言えないのです。つまり，意識的なプロジェクトのような形で実現するものではない。一定の方法によって釣り合いを保障する，というやり方ができないのです。経験知と理論知について，ここでは詳しい説明を省きますが，これまでの議論を一言でまとめればこうです――，都会と農村の釣り合いは経験知に属すると考えられ，それを直接的に論じることは困難である。つまり，その種の二者は釣り合いの条件を理論的に確定したり，予測したりすることが難しいということです。

釣り合いの関係それ自体を論じる，そういう方針を捨てること，これが延吉の態度なのです。ではそれに代えて何を言うのでしょうか。釣り合いの関係が実現できるとすれば，その時最低必要な前提は何か。そこに目を向けるのです。もう少し丁寧に説明してみましょう。最低必要な前提とは，釣り合いが生まれるために十分な条件とは言えないけれども，釣り合いが可能となるために最低限必要な条件のことです。根と花の釣り合いが保たれ，全体が生き生きとした姿となるために，少なくとも根が生きているということが必要です。花についても同じです。生きているというだけでは十分ではないでしょう。しかし生きていることは最低限必要な条件なのです。都会と農村についても同じです。都会が都会らしく活動し，農村が農村らしく生活する時必要な条件が整い，両者の釣り合いの可能性も生まれる。『農村自治の研究』は，そういう意味で，農村のあるべき姿を提唱する著作なのです。農村の自治こそは農村のあるべき姿であり，「いわば天地自然の道」だと延吉は言います（37頁）。したがってそれは単なる農村・農業論なのではなく，将来，都会との釣り合いを取り戻すために最低必要な条件を説くものなのです。そのようにして社会という草花が全体として活力を取り戻すであろうこと，それを延吉は信じて疑いません。

さて『農村自治の研究』という著作には農村の自治が様々な面から解明されています。自治の組織，農村教育，道徳，農村自治の障害などが詳しく論じられているのです。ここでは農村と農業の意義を説く延吉の言葉を一，二紹介しておきます。

農業の多面的機能のひとつとして環境保全の働きが今日よく話題になります。EC 諸国では農業の省庁と環境の省庁とが合体されています。すでに環境保全の機能は常識となってきました。しかし延吉はいち早く明治時代にそれを指摘しているのです。ただし彼独特の口調でこう唱えています――，

> 「農業には廃物が出来ない。捨てるものがない。世を汚す糞尿も，家の回りを気持悪くする

溝泥も，猫や犬の死体でも，雑草でも，塵埃でも皆化して滋味とし，美果とするのが農業である。故に農業は四民が寄って集まって汚すこの世の中を浄土とする業である」（『山崎延吉全集』第 1 巻）

しかしまた延吉の強調する農村の意義には現代人の見落としているものもあります。ひとつの大切な点は農村が人材を育成するということです。都会では得がたい大らかな人間性を育てるということです。逆に言えば農村が衰退するとき，社会に必要な人材を育てるところが無くなってしまうのです。人材育成は延吉が最も誇らしげに農村を称える文脈で展開しています――，

「（農業について）いろいろな解釈はあるが，通常人の云えるは，衣食住その他人類に必須なるものの原料を生産するものなり，というのである。しかるにドイツのフーベルという人は，農産物中最も重要なるは人間なり，と説いているそうな。この説に吾輩は至極賛成なのである。なぜならば都会の繁昌を極める今日においては，もはや農業以外に健全な人間を生産するものがないからである。」（41 頁）

その主著『農村自治の研究』において，山崎延吉の農村論は豊かな展開を見せることになります。ただしそれは都会と農村の釣り合いという，大きな視野の中で語られているわけです。ここに紹介したような農村の意義を語る言葉もそういう意図から出ているのです。農村の意義を様々な面から強調すれば，それによって農村自治の論拠が築かれる。そして農村の自治が復興すれば，都会にたいして釣り合いのとれた農村が，何時の日かは生まれるはずだ。そういう考え方なのです。

以上では延吉の思想の，ある意味で，哲学的な面に触れてきました。しかし思想家としての山崎延吉ということであれば，農本主義の思想家であるとか教育思想家であるとか様々な評価をすることもできるでしょう。残念ながら，ここではそうした面にまで立ち入ることはできません。その代わりに山崎延吉に関する読みやすい入門書を紹介しておきますので，それを参照してください。安達生恒『山崎延吉――農本思想を問い直す』，東京・リブロポート，1992 年。（シリーズ　民間日本学者 36）